

千葉県八千代市

正覚院館跡

—埋蔵文化財発掘調査報告書—

宗教法人 池証山正覚院
八千代市遺跡調査会

例 言

- 1、本書は、昭和59年9月22日～10月17日まで行なわれた千葉県八千代市村上1530番地外に於いて実施した遺跡調査の報告書である。
- 2、この調査は、開発主である正覚院から八千代市遺跡調査会が委託を受けて実施したものである。
- 3、発掘にあたっては、下記の組織によった。
 - 八千代市遺跡調査会
 - 会長 蜂谷 昭夫
 - 事務局 篠田 一郎
 - 小笠原和也
 - 秋山 利光
 - 調査担当者 高野 博光（日本考古学研究所）
 - 補助調査員 飯島 伸一（明治大学）
- 4、遺物整理にあたっては、長内美知枝・野口秀子・新井和之氏の協力を得た。
- 5、発掘調査及び整理報告に至るまで、下記の人々の助言、指導をいただいた。
 - 吉岡康暢（国立歴史民俗博物館）
 - 藤下昌信（日本考古学研究所）
 - 山下守昭（埼玉県入間郡鶴ヶ島町教育委員会）
- 6、本書の執筆は高野・藤下が行なった。
- 7、本書の編集は八千代市遺跡調査会が行なった。

目 次

遺跡の位置と環境	1
調査概要	5
1. 調査方法	5
2. 調査日誌	5
3. 土塁及び窪地	7
出土遺物	12
I. 中世以前の遺物	12
II. 中・近世の遺物	12
まとめ	18

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 地形及び調査範囲図	3・4
第3図 トレンチ設定図	5
第4図 第1・2トレンチ土層図	8
第5図 第3～6トレンチ土層図	9・10
第6図 出土遺物(1)	13
第7図 出土遺物(2)	14
第8図 出土遺物(3)	15

図版目次

図版1 正覚院館跡航空写真	21
図版2 遺跡風景(1)(2)	22
図版3 第3・4トレンチ風景、第3・4・5トレンチ風景	23
図版4 第2トレンチ東壁セクション、第3トレンチ南壁セクション	24
図版5 第4トレンチセクション	25
図版6 出土遺物	26

遺跡の位置と環境

本遺跡は八千代市村上1530番地外に所在する。遺跡は京成線勝田台駅より北西約2kmの台地斜面に位置する。

この遺跡の所在する台地は下総台地と呼ばれ、千葉県北部一帯を占める台地である。台地の南端は東京湾、北端は手賀沼や利根川、南、東部は九十九里浜や上総丘陵に接し、標高は20～40mの低台地で、南東部が最も高く、標高100m前後、西部は40m以下となり、北、北西部は低くなっている。最も低い所では15m前後となっている。遺跡がある八千代市を見ると、北東側は印旛沼からのびる樹枝谷、及び沼に入る小竹川、手繰川等、西側は船橋市の海老川、南側は新川、勝田川等の開折による溪谷、及びその小支谷によって樹枝状に侵蝕されている。遺跡は台地の南西側に位置し、台地下は新川が流れている。遺跡は広範囲で、正覚院の寺領外にまでおよび、本堂を取囲むように土塁、さらに北側に空堀が現存している。今回の調査は本堂の北および西側の土塁、及び、北側の窪地（空堀と土塁の間）である。土塁は釈迦堂の北側から本堂の西側を通り、北、東方向に延びている。窪地は地形的には南側が開口しているが、現存では土塁が構築され、この地の利用価値を高めている。現在、付近は宅地化が進み、樹木が少なくなっているが、境内にはヒノキ、スギ、カシ、モミ等が繁茂し、調査地はスギ、タケ、カシ等の樹木でおおわれ、スギは30数年前に植林されたものである。

周辺の館跡を見ると、北側約1.8kmのところにも米本城跡、対岸に位置し、北西約1.2kmのところに飯綱権現砦跡、さらに北西約3kmのところに吉橋城跡、尾崎館跡、南西側に約3kmのところに高津館跡等が存在している。いずれも15～16世紀頃の構築と言われているが、正確な年代はつかめない。本遺跡の正覚院には宝篋印塔（応永18年）、及び清涼寺式釈迦如来立像があり、この寺の古さを物語っているが、館との関係を直接示す資料は欠けている。文献等の研究によると当地方は千葉氏一族の支配下なので、付近の館を含めて一族のものと推定しているのが現状である。

参考文献

八千代市史編さん委員会 「八千代市の歴史」 昭和53年

八千代市中世館城址調査団 「八千代市中世館城址調査報告」 昭和51年

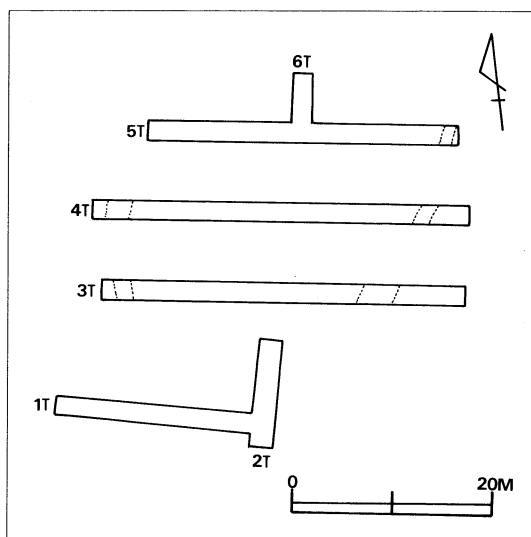


第2図 地形及び調査範囲図

調 査 概 要

1. 調査方法

今回の調査対象地域は台地の傾斜地及び窪地に築かれた矩形の土塁の一部である。調査する土塁は現存で東西方向に延長約25m、南北方向に延長約23mあり、南端が削平されている。発掘調査は土塁の構築状況等を把握するためにトレンチ法を用いて実施した。現況保存のため最少限のトレンチを2本設定した。窪地は東西方向にトレンチ幅2m、トレンチ間隔6mで3本設定したが、木の根のため3本ともトレンチの長さは異なってしまった。また、北側にある空堀の外側に南北方向に一本トレンチを設定した。トレンチ番号は南側から順に第6トレンチまで付した（第3図）。



第3図 トレンチ設定図

2. 調査日誌

昭和59年9月22日

調査員及び作業員、現地に集合して最後の調査打ち合せを行なう。調査範囲を再確認し、すぐに地元の人達による木の伐採に入る。また、発掘器材一式が搬入され、調査体制が整った。

9月23日

昨日に引き続き木の伐採を行なう。

9月24日

木の伐採を行なう。数が多いので作業が長びく。

9月25日

一部、木の伐採が終了しているので、ここから下草刈りを行ない、トレンチを設定して調査に入る。

9月26日

昨日に引き続き、第1トレンチを調査する。

9月27日

第1トレンチを調査する。

9月28日

第1トレンチの写真撮影をする。

9月29日

休み。

9月30日

第1トレンチの土層図を作成する。引き続き第2・3トレンチに入る。

10月1日

第3トレンチは木の根が多く、思うように進まない。

10月2日

引き続き、第2・3トレンチを発掘する。第2トレンチはかなり深くなって来た。

10月3日

第3トレンチを主に調査する。深さ1m以上になり、ますます作業は進まなくなった。

10月4日

第3トレンチで板碑の破片が出土する。本日は木の根と深掘であまり進まなかった。

10月5日

第4・5トレンチを主に調査する。

10月6～8日

休み。

10月9日

第4トレンチを調査する。

10月10日

第4～6トレンチの木の根を重機で取り除く。

10月11日

木の根がなくなったので、作業は進み、第2・3及び4トレンチの一部を残して終了する。

10月12日

第4～6トレンチを調査する。

10月13日

第5トレンチを主に調査する。第2トレンチの土層図を作成する。

10月14日

第6トレンチを終了する。第3～5トレンチの土層図を作成する。

10月15日

第4～6トレンチの土層図を作成する。

10月16日

全測、及び写真撮影を行なう。

10月17日

器材を返却し、本日をもって作業は終了する。

3. 土塁及び窪地

A. 土 塁

土塁の構築状況等を把握するために、第1・2トレンチを設定した。

第1トレンチ (第4図)

第1トレンチは調査区の南側に幅2m、長さ19.5mの規模で設定した。土塁は基底部約8m、高さ約2.5mで、断面は台形を呈する。堆積状態は第11、12土層を地山にして、第6土層を敷つめて、順次、各層積み上げて構築しているが、第4、5、7、8土層にはロームブロックを混入させて、盛土の流出を少なくしている。遺物は古代と中世のものが出土したが、中世の遺物は土塁の裾及び土塁外の包含層で検出された。古代のものは土塁下の第2、13土層で多く出土し、盛土中からはわずかししか検出されなかった。なお、土層図は北壁で作成した。

第2トレンチ (第4図)

第2トレンチは土塁に対して、幅2.5m、長さ10.8mの規模で設定した。土塁は基底部推定8m以上、高さ約3mである。堆積状態は第12、13土層を地山にして、第6土層を敷つめて、順次、粘土を含む土層を流出しない様に積み上げて構築している。遺物は盛土中から少量検出されたが、大半は第2、13土層からである。土師器が多い。土層図は東壁で作成した。

B. 窪 地

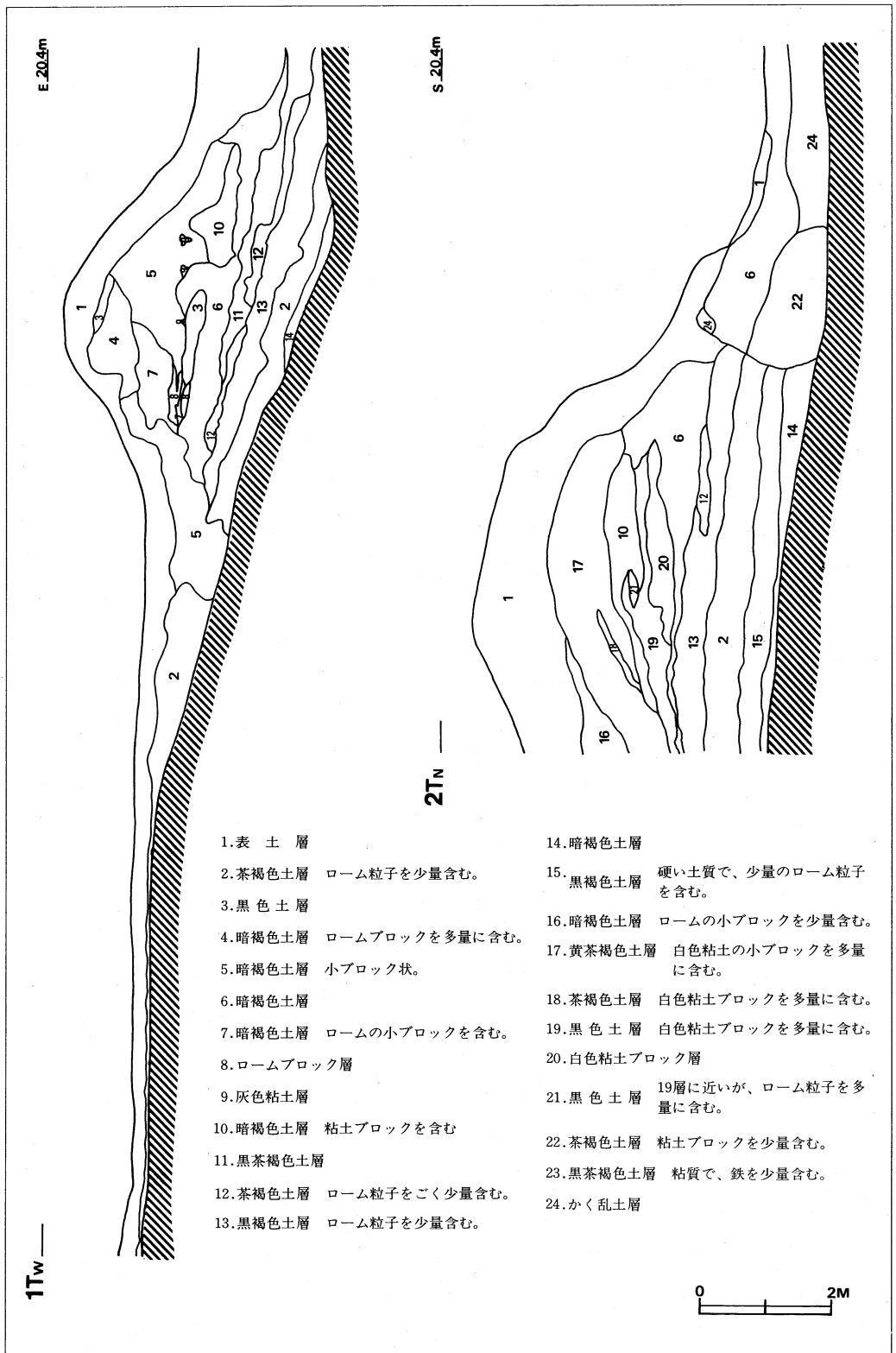
自然及び人工の窪地かを把握するために、第3～6トレンチを設定した。

第3トレンチ (第5図上)

第3トレンチは幅2m、長さ36.2mの規模で設定した。土塁の裾に近いので、土塁の盛土の影響が見られる。第4土層がそれで、土塁の第17～20土層に対比される。第6～9土層は土師器の包含層である。東と西側の傾斜部に粘土の層、つまり第3、12土層が見られる。中世の遺物が出土したトレンチで、主に第5土層より多く出土した。板碑もこの層より発見された。土層図は南壁で作成した。

第4トレンチ (第5図中)

第4トレンチは窪地の中央に幅2m、長さ37.5mの規模で設定した。中央の窪み方向に傾斜しながら土層も堆積し、第8土層は厚さを増している。また、第3トレンチ同様、東と西側の傾斜地に粘土の堆積が見られる。遺物は少なくなり、ほとんど土師器であるが、一ヶ所にまとまって瓦質土器が出土した。土層図は北壁で作成した。



第4図 第1・2トレンチ土層図

3Tw

E_23m

4Tw

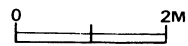
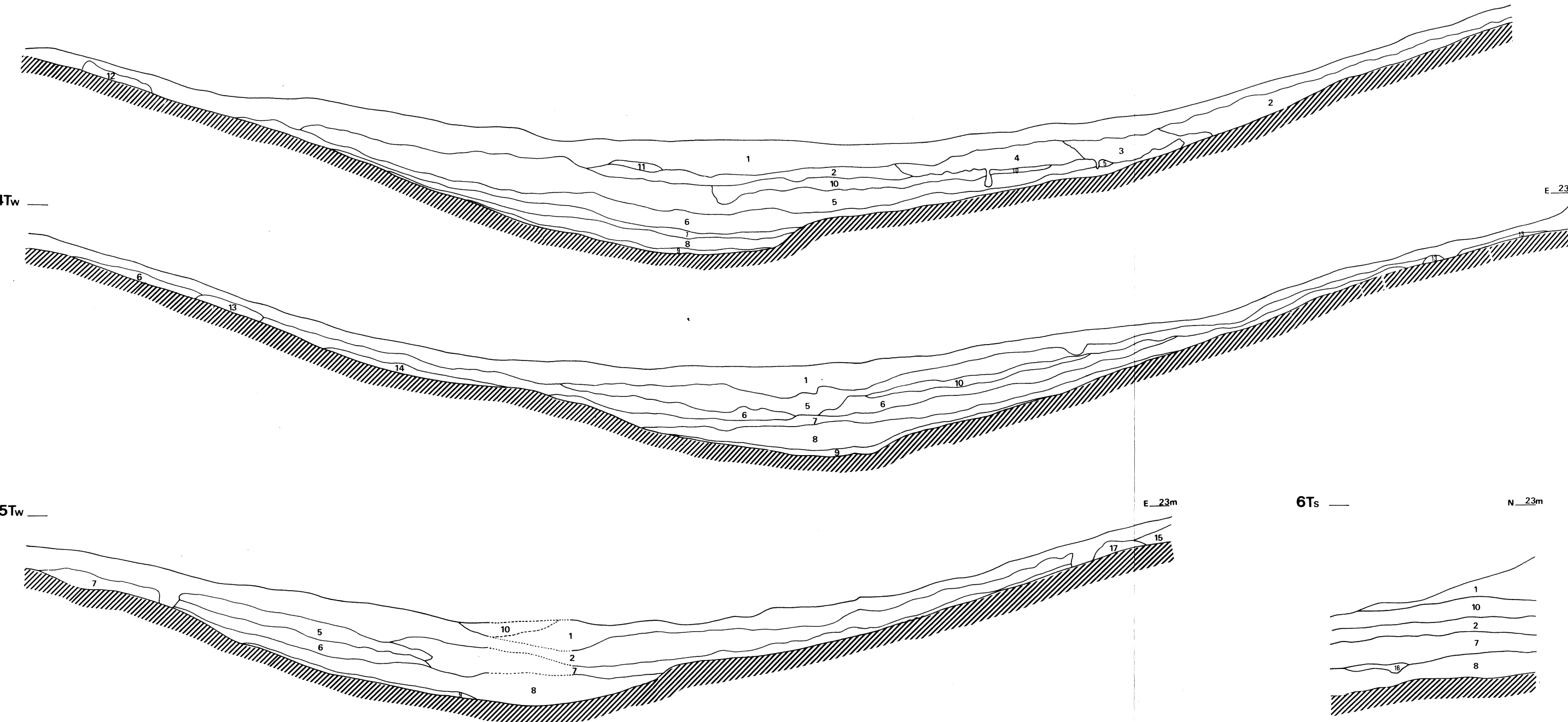
E_23m

5Tw

E_23m

6Ts

N_23m



- | | | |
|----------|-----------|-------------------|
| 1.表土層 | 10.黒茶褐色土層 | ごく少量のローム粒子を含む。 |
| 2.黒茶褐色土層 | 11.暗褐色土層 | バサバサしている。 |
| 3.茶色粘土層 | 12.茶色粘土層 | ローム質である。 |
| 4.白色粘土層 | 13.暗褐色土層 | ローム質粘土ブロックを多量に含む。 |
| 5.黒茶褐色土層 | 14.茶褐色土層 | 粘質である。 |
| 6.黒褐色土層 | 15.茶褐色土層 | バサバサしている。 |
| 7.茶褐色土層 | 16.茶褐色土層 | ローム粒子を多量に含む。 |
| 8.茶黒褐色土層 | 17.茶褐色土層 | 粘土の小ブロックを少量含む。 |
| 9.暗褐色土層 | | |

第5図 第3~6トレンチ土層図

第5トレンチ (第5図下)

第5トレンチは窪地の北側に幅2m、長さ27.8mの規模で設定した。第5、6土層が一部欠如するが、第8土層は厚く堆積している。東側に粘土が見れるが、西側は見られない。遺物は土師器が少量である。土層図は北壁で作成した。

第6トレンチ (第5図下右)

第6トレンチは窪地の最北端に幅2m、長さ5mの規模で設定した。北側より傾斜して土層が堆積し、盛土に関する層は見られなかった。また、トレンチの北側より約1mのところに東西方向に延る空堀が見られるが、このトレンチでは空堀の状況はつかめなかった。遺物は数点土師器が出土した。土層図は西壁で作成した。

出土遺物

I. 中世以前の遺物

土塁の盛土中及び窪地の包含層から古代の遺物、主に土師器片がパンケースで1箱程度出土したが、土塁の盛土中からはごく少量しか出土しなかった。

土器 (第6図1～6)

1・2は坏形土器で、1は偏平な体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部は直立し、口唇部は尖り気味となっている。口縁部内外面とも横ナデ、体部外面はヘラ削りを施す。2は体部が薄い器厚の底部から内彎して立ち上がり、口縁部は直立しながらやや外反する。口縁部内外面とも横ナデ、体部外面はヘラ削りを施す。色調は1が暗褐色、2は茶褐色を呈し、焼成は良い。胎土は微細砂粒を少量含まれている。

3は須恵器の坏で、一定の器厚の底部から内彎して立ち上がる体部は中位から直線的に外反する。ロクロ成形で、体部下半はヘラ削り、底部はヘラ削り調整のため切り離しは不明である。色調は灰褐色で、焼成は良好である。胎土は雲母を含む微細砂粒を多量に含んでいて、ややザラザラする感じである。

4は須恵器の蓋で、つまみはかるく外反し、中央部で凹む。ロクロ成形で、天井部外面に回転ヘラ削りを施す。色調は暗灰褐色で、焼成は良い。胎土は石英、雲母を含む微細砂粒が目立つ。

5はくすべ焼成の土器であるが、小片のため器種は何とも言えない。胴部に叩き目を施す。色調は赤褐色で、焼成は良い。胎土は精選されている。

6は須恵器の甕形土器の破片である。櫛歯状の沈線を施文する。色調は青灰褐色で、焼成は良い。胎土は精選されている。

石器 (第6図7)

石質は砂岩で、全面使用しているが、両端に自然面を残す。

II. 中・近世の遺物

量的には少ないが、陶磁器、古銭、板碑等が出土した。板碑は磨滅のため文字等が判読出来なかったので図示しなかった。

1. 舶載陶磁器

中国産の青磁で、龍泉窯系のものである。

(1) 青磁 (第6図8・9)

碗の破片で、第3トレンチより出土した。

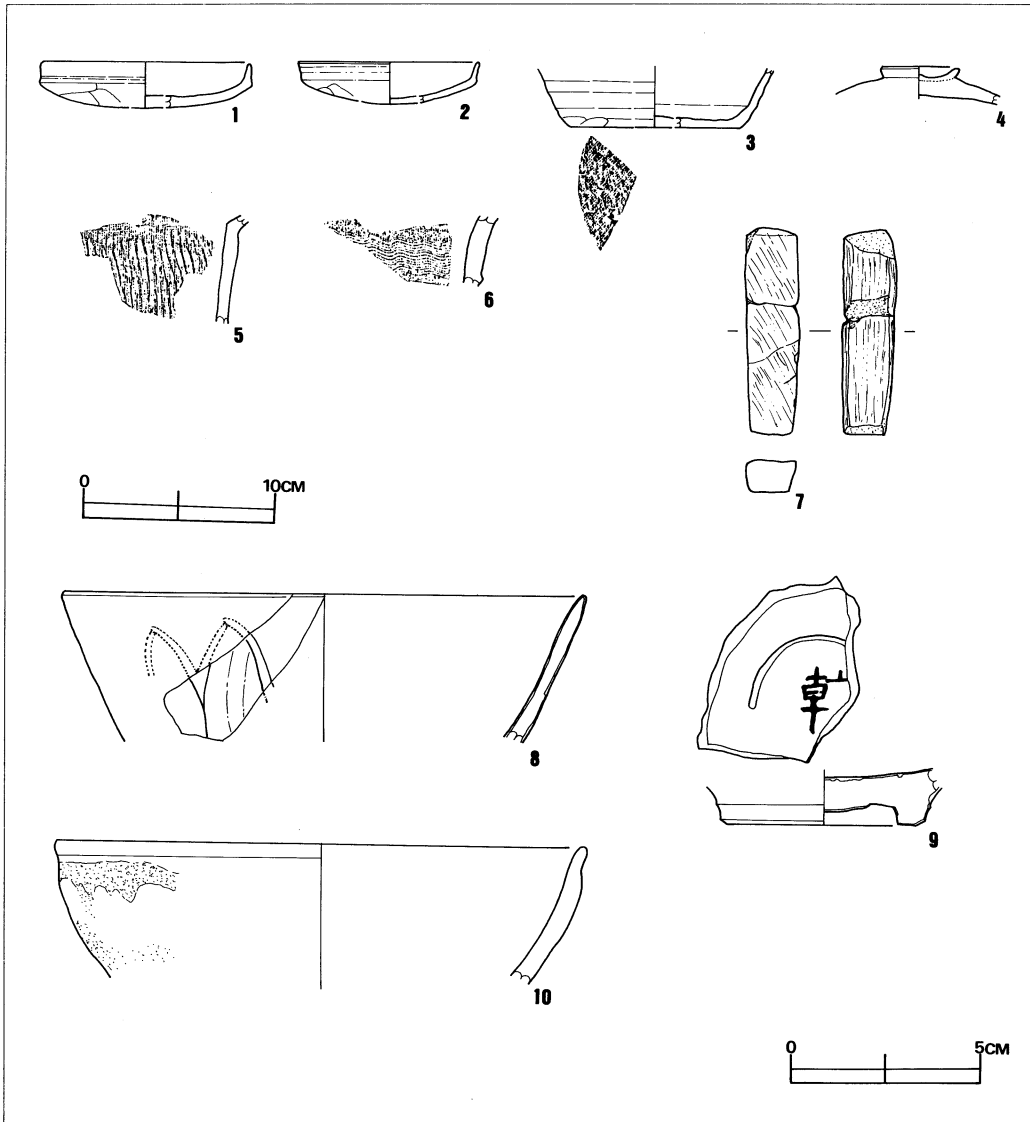
8は推定口径13.7cmで、口縁部は直進する。素地は灰白色で、黒色粒をごく少量含むが堅緻

である。釉は気泡を含んでいない安定した淡い淡緑色を呈する。外面の鎬蓮弁文は広い。

9は底部破片で、底径4.4cmである。高台は角高台で、接地部は平坦である。底部は糸切り痕を残す。素地は灰白色を呈し、わずかに気泡を含んでいる。釉は淡緑色で、全面に施釉後、外底の釉を輪状にふきとっているが、同時に高台の内側もふきとっている。また、内、外面に貫入が見られる。内面見込みに輪状の沈線及び推定で「韓」の銘が型押されているが、型押とすると釉のはなれぐあい不鮮明なので、多少疑問に思う。

2. 国産陶器

少ないが、畿内地方のものが出土している。



第6図 出土遺物(1) 1~10

(1) 天目茶碗 (第6図10)

口径約13.8cmで、口縁部が直立気味の体部上半から、わずかにくびれてかるく直進する。素地は灰褐色で、焼成は良い。釉はチョコレート色で、くびれ部より下半に鉄釉流しが見られる。第1トレンチ出土である。美濃産と思われる。

(2) 常滑系甕 (第7図11~13)

第1トレンチより3点出土した。11は大甕の肩部破片である。張り出した肩部に押印が施されている。外面はナデ調整を行ない、内面の成形は「よりこ」を輪積し、指頭による圧痕が施されている。焼成は良好で、色調は灰暗褐色を呈し、胎土は小さな砂粒が目立つ。

12・13も大甕の破片で、12は外面がヘラ削り、内面はナデ調整、13は両面ともナデ調整が施されている。色調は茶あるいは灰褐色で、焼成は良好である。胎土は12が小さな砂粒が目立つが、13はやや小さい砂粒が多量に含まれている。

3. 土器

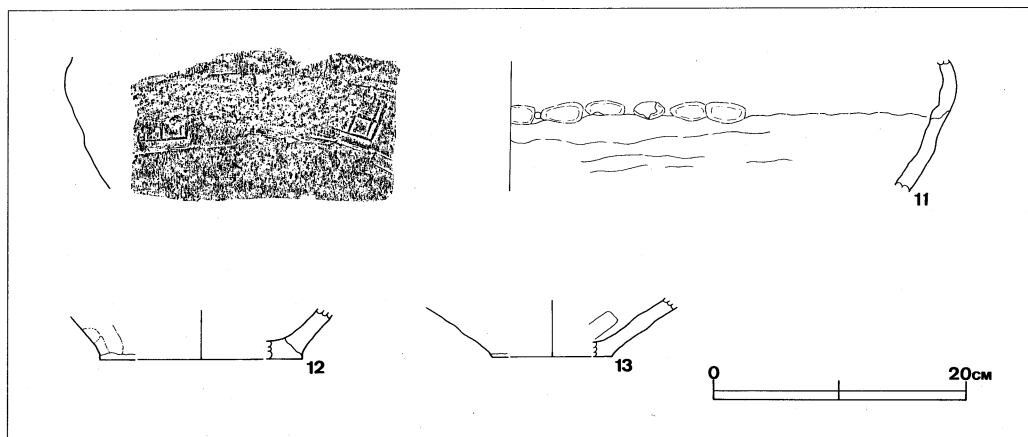
瓦質雑器及びかわらけ等が出土している。

(1) 瓦器質火舎 (第8図14~16)

5点出土し、すべて第4トレンチ東側で一括して出土した。14は底部付近の破片で、外面は叩き目施文後、良く研磨され黒色で光沢をもっている。内面はナデ整形で、研磨されていない。胎土は微細砂粒を含むが、精選されている。また、断面図で示した様に、器肉中に約3~4mm幅で黒色帯が見られる。15・16にも存在する。焼成はあまり良くなく、器面はザラザラしている。色調は内面が灰黒褐色を呈する。

15は口縁部破片で、かるく外反する。叩き目が施され、色調は灰黒褐色で、焼成はあまり良くない。胎土は石英、雲母を含む微細砂粒が目立つ。14と同様、器面は研磨されていたと思うが、現存ではザラザラしている。

16は底部の破片で、外面に叩き目が施文されている。色調、焼成、胎土は15に類似する。



第7図 出土遺物(2) 11~13

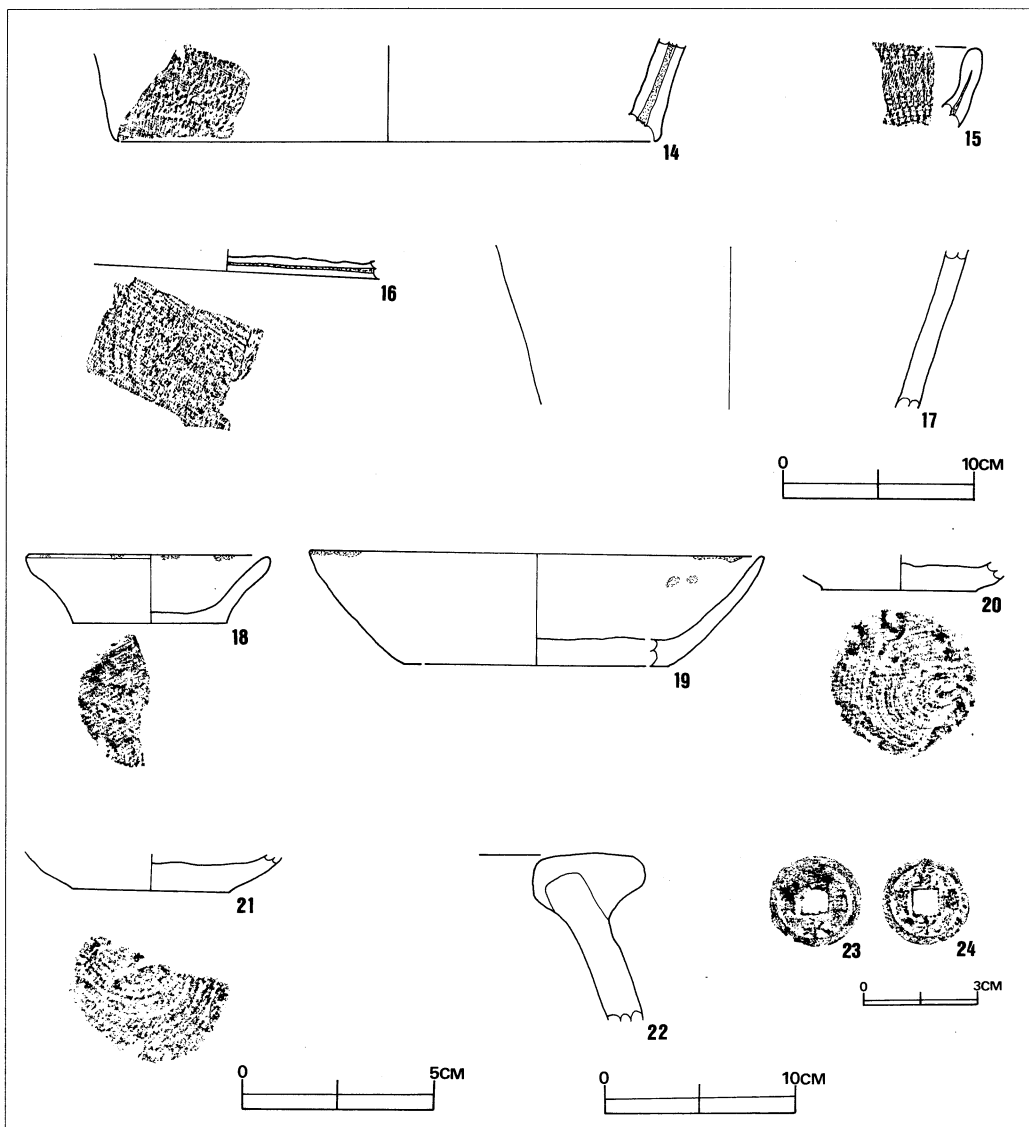
(2) 不明 (第8図17)

少破片のため器種は不明である。外面が黒色に研磨されているが、内面は見られない。色調は良く、胎土は石英を含む微細砂粒が多量に見られる。瓦器質の鉢と推定している。

(3) かわらけ (第8図18~21)

4点と少ない出土であるが、若干の観察は出来る。

18は小さい土器で、口径約5.9cm、底径約4cmである。体部は底部よりやや内彎して立ち上がり、口縁に向かって直線的にやや外反する。口縁部は若干器厚を増す。底部は右回転糸切り痕を残す。焼成はあまり良くなく、胎土は石英、雲母を含む微細砂粒が目立つ。色調は赤褐色である。また、内外の口唇部には炭化物の付着が見られる。第1トレンチ出土である。



第8図 出土遺物(3) 14~24

19は推定口径約11.9cm、底径約7cmを計る。底部より口縁に向かって直線的に外反する。底部は回転切りである。焼成は良く、色調は茶褐色を呈し、胎土は石英、雲母を含むが、精選されている。内外面の口唇部及び内面に炭化物の付着が見られる。第1トレンチ表採である。

20・21は底部破片で、共に右回転系切り痕を残す。20は底径約4.05cm、21は底径約4.1cmを計る。色調は20が茶褐色、21は黒味がかかった淡褐色で、焼成は良好である。胎土は微細砂粒が目立つ。20は第1トレンチ、21は第3トレンチ出土である。

(4) 土師器 (第8図22)

甕の破片と思われる、正確な器形はつかめない。口縁部はくの字状にくびれて、口唇部は器厚を増す。外面はナデ調整、内面はヘラ削り後、ナデ調整が施されている。焼成は悪く、色調は茶褐色を呈し、胎土は長石、石英が目立つ砂粒が多量に含まれている。第3トレンチ出土である。

4. 古 銭

2点出土したが、さびが出ていて状態は良くない。第4トレンチから出土した。

寛永通宝 (第8図23・24)

23は、銭面全体が鉄錆に似た様な黒褐色を呈しており、無背である。直径24.0mm、肉厚は、縁部で1.5mm、文字面で1.0mmを測り薄肉である。

銭面の各部を計測すると、縁の幅は2.0~2.5mm。穿は縦・横とも6.0mmであるが、穴は錆が付着して円形を呈している。郭は0.5~1.0mmと細部の部に入る。裏面は無背であり、縁の幅は、2.5~3.5mmと銭面より若干幅広である。穿の大きさは表と同様の計測値が得られた。穿の周囲を方形にめぐる郭は平均2.0mm幅である。

次の面文を観察してみると、第1字の『寛』は腐蝕が甚だしく潰れ気味で、ほとんど判読できない。あとの3文字も肉眼では、その特徴をとらえることが困難であり、ルーペを覗きかろうじて文字の様態を把握できるという状態である。第2字『永』の第1画は点「丶」であり、末尾のはねはない。第2画は、ややうつむき加減で、いわゆる俯永の状態に近いと見て良いのではなかろうか。第3字『通』の「辶」は不明確であるが、第3画は、古寛永銭によく見られる極端な右下がりの流れではなく、その半分まではむしろ水平に近く、末尾が若干右下へ流れている程度である。また、旁である「甬」の第1画と第2画は、寛永銭に多い「コ」の字状ではなく「マ」の字を示している。なお、その下位にある「用」の字の第2画が猫背状に丸味を帯びているのが特に注意される。第4字の『寶』は、全体に細身であり、「貝」部の第6・7画は、古寛永銭に見られる「人」形ではなく、新寛永銭の特徴とも言うべき「ハ」の字状を呈している。

23は、直径ならびに各部の計測値、さらに比較的明確な特徴として扱えられる「通」の文字、やや左に傾き加減の「永」の字（俯永）等から考えて、関東の銭風とは異なると言われている享保11年（1726年）山城国の京都七条河原で鑄造された古銭、通称「狭目寛」と呼ばれる新寛永銭

ではないかと思われる。

24は、直径23.0mm、肉厚は縁部で1.0mm、文字面で約0.8mmと23より薄肉であり、数百種にも及ぶ寛永通宝銭の中でも小形の部に入る。銭面は、縁の幅が2.0～2.5mm、穿は6.0mm四方、郭は0.5～1.0mmを測る。裏面は無背であり、縁の幅2.0～3.0mm、郭は1.0～2.0mmである。直径を除き、各部の計測値は23と大差はない。

24は23に比して腐蝕の度合いが少ないので、文字の様態の特徴は肉眼でも比較的把握することができる。読みとれる範囲で観察してみると、総体的にしっかりとした書体であることに気づく。また、4文字とも縁と郭の間の狭い空間を隙間なく埋めているのが注意される。以下、4文字について観察することにした。

まず、第1字の『寛』の字であるが、第7画以降の「見」の第5画がやや長目であり、他は余り変化がない。第2字の『永』は、第2画の「丿」が23とは異なり直立しており、末尾のはね上がりもやや長目である。また、字丈が短く平永と呼んでも差支えないものと思う。なお、最終画が上にはね上がっているのが注意を引く。第3字『通』はその傍である「甬」の第1・2画は、「マ」でなく「ユ」である。第4字の『寶』は、総体的に細身であり、「貝」の第6・7画の「ハ」は開き気味で、「目」から僅かに離れている。

24は各部分の計測値、4文字の特徴等から見て、元文3年（1738年）出羽国秋田川尻村川口で鑄造された通称“跋高寛”と呼ばれる寛永通宝銭ではなかろうかと考えている。（藤下）

参考文献

小川浩編「寛永通寶錢譜」 内外貨幣研究会 昭和35年

小川吉儀編「新寛永錢鑑賞の手引」 万国貨幣研究会 昭和37年

ま と め

遺構について

今回実施した調査は土塁の一部及び窪地の調査で、館跡そのものではないため遺構等の発見はなかった。土塁は現存しているため、規模等の再確認及び、構築の一部を把握する程度で、追加資料は得られなかった。土塁の位置は本堂を取囲むようにあり、つまり東側の台地の裾から西方向へ約25m延び、コの字に曲がって南方向に延び、墓地の東側に達し、この辺から削平されて現況では確認出来ない。窪地は本堂の北側にある土塁と最北側の空堀との間にあり、地形的に見て窪んでいるため便宜的に付けた名で、八千代市史のC（上段面）に該当する。層から観察すると、全体的に自然堆積で、当時から窪んでいた様子が伺えるが、しかし、一部に異なる層も傾斜地に存在している。土質は粘土系で、この層は土塁などに見られる盛土と近似している。この点を重視するならば、窪地を囲む様に、盛土があったと推定出来るが、位置及び盛り方を見ると土塁とは思われない。むしろ、次の様に見るのが良いのではないか。つまり、窪地の傾斜度及び、粘土の規模から見て、テラス的なものを推定し、この利用は今のところ、土の流出留めあるいはより窪地を深くする施設と考えているが、まだ、良い意見には達していない。

遺物について

遺物の説明で記したので、若干の補足を加えてまとめたい。

本遺跡も最も古いものは7世紀中頃のもので、1・2・6が該当する。3～5は8世紀後半に比定される。7は砥石で、これのみでは時期比定は困難であるが、どちらかに伴出したことは確かである。

8・9は中国産の青磁で、龍泉窯系のものである。2点とも碗で、鎬蓮弁文を施すもので、日本各地より多く出土している。そのため、型式分類や編年が行なわれ、碗についてはかなり研究が進んでいる。これを参考にすると、13～14世紀に見られるが、14世紀ぐらいと推定している。

9は銘が不明であるが、これも「韓」の字と推定したが、まだ、問題がある。

10～13は国産で、10は天目茶碗で、美濃産と思われる。15世紀頃のものである。11～13は常滑系の大甕で、これも15世紀頃に位置づけられる。

14～17は瓦質雑器で、すべて小破片のため正確な器種はつかめないが、火舎と推定した。17は不明で、14～16より焼成、胎土は良い。この土器は時期比定が困難であるが、一応、江戸時代と考えた。

18～21はかわらけでこれも比定が困難である。出土地より推して、15世紀頃のものと推定した。出土点数は少ないが、小さなものが多く、大きいもので、口径が約12cmである。口唇部に炭化物

の付着から見て燈明皿としての用途が考えられる。

23・24は新寛永通寶で、江戸時代のものである。

他に、小さな板碑が出土しているが、磨滅のため今回は省略した。第3トレンチより出土している。なお、本堂建立時にも板碑が出土している。

以上、遺構、遺物について簡単に述べたが、遺物から見れば、館の年代は推定出来るが、まだ、問題がある。今後、文献などとあわせて正確な位置づけをしたい。

参考文献

八千代市史編さん委員会 「八千代の歴史」 1978年

横田賢次郎・森田勉 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」

九州歴史資料館研究論集4 1978年

亀井明徳 「日本出土の明代青磁碗の変遷」 鏡山先生古稀記念古文化論攷 1980年

上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類について」 貿易陶磁研究No.2 1982年

報 告 書 抄 録

ふりがな	しょうかくいんかんし							
書名	正覚院館跡							
副書名	一埋蔵文化財発掘調査報告書一							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	高野博光							
編集機関	八千代市遺跡調査会							
所在地	〒276-0045 八千代市大和田138-2 教育委員会生涯学習部社会教育課内 TEL047-483-1151							
発行年	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうかくいんかんし 正覚院館跡	やちよし 八千代市 むらかみ 村上1530	1221	201	35度 43分 35秒	140度 07分 04秒	1984.9.22~ 1984.10.17	279m ²	墓地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
正覚院館跡	館跡	中世	土塁		古墳時代 土師器 奈良平安時代 須恵器 中近世陶磁器 寛永通宝			



正覚院館跡航空写真

図
版
2



遺跡風景(1)



遺跡風景(2)

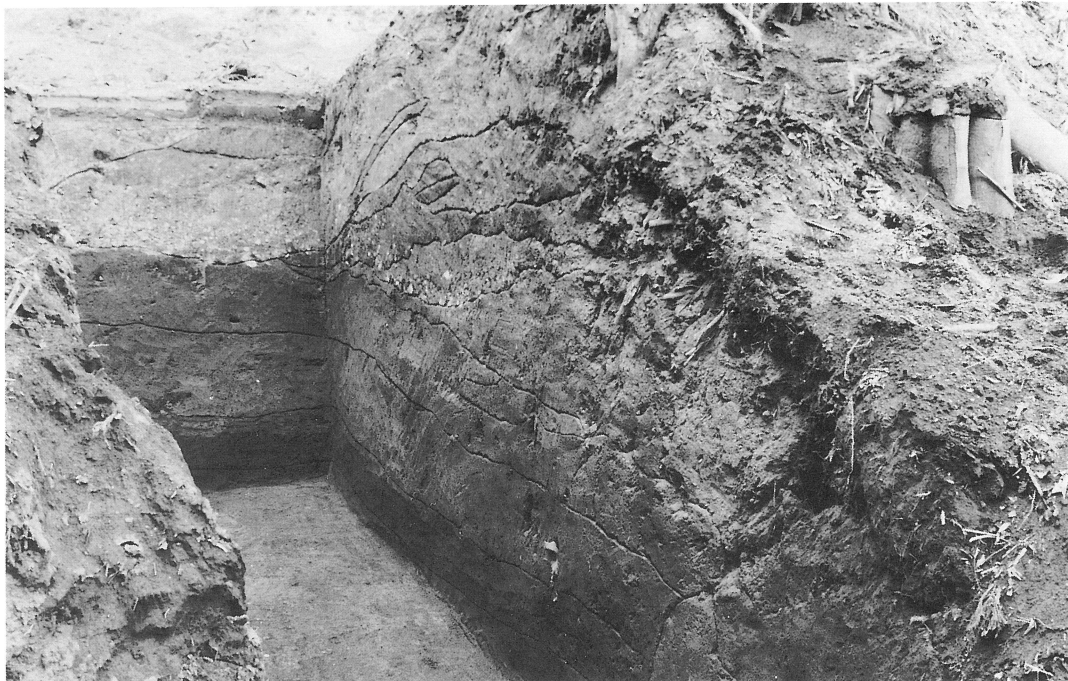


第3・4トレンチ風景



第3・4・5トレンチ風景

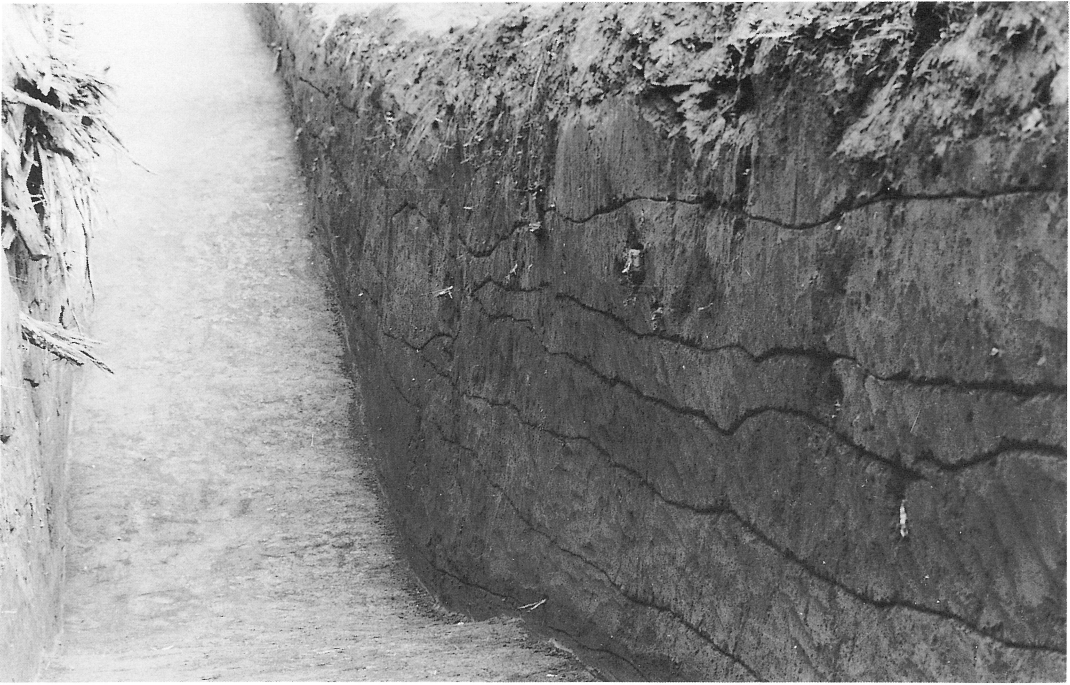
図
版
4



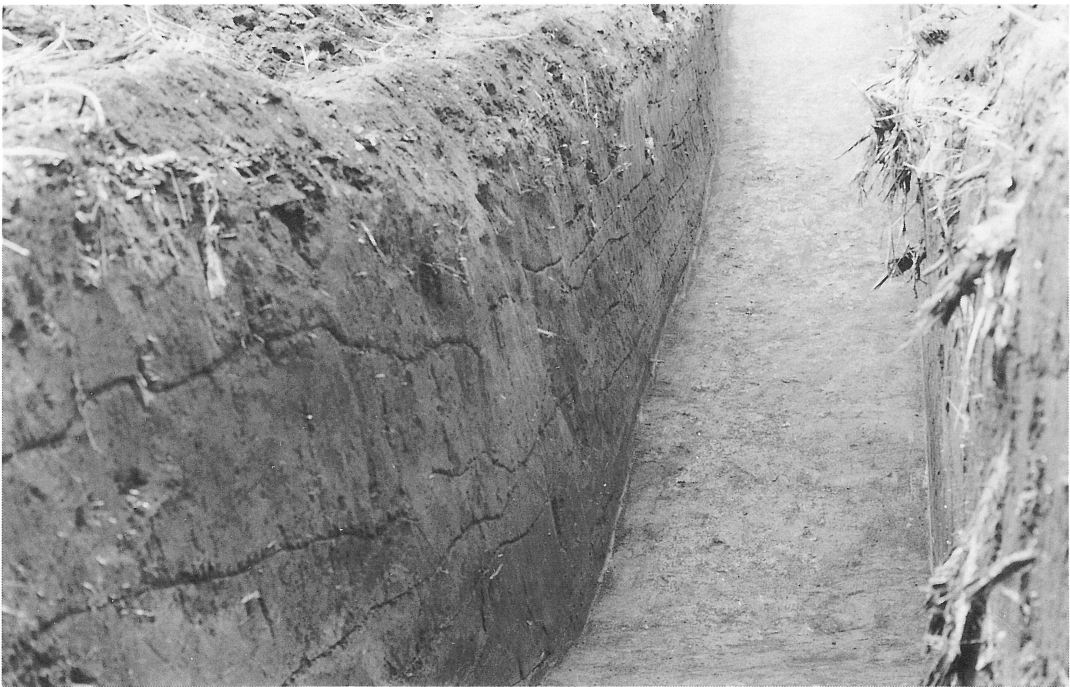
第2トレンチ東壁セクション



第3トレンチ南壁セクション



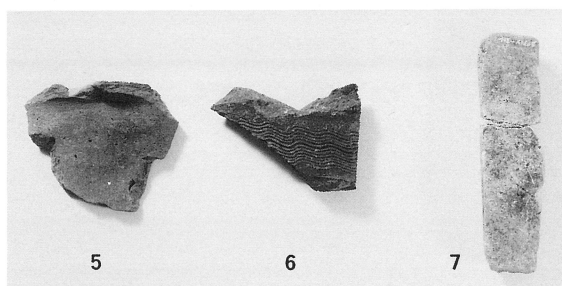
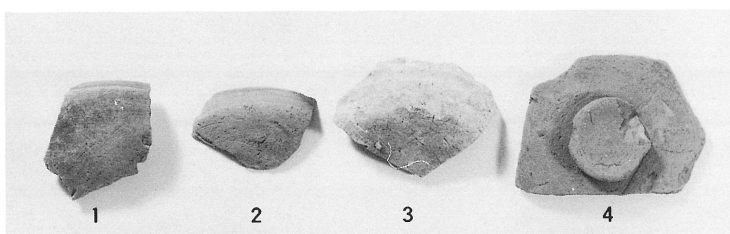
第4トレンチセクション



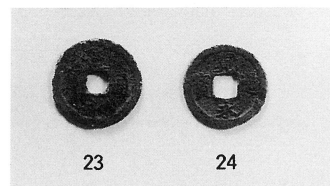
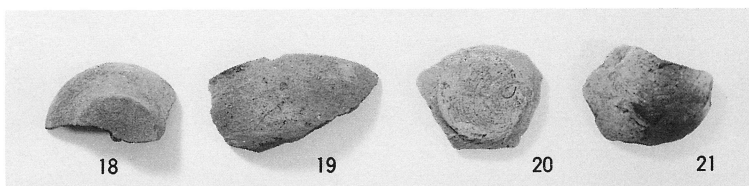
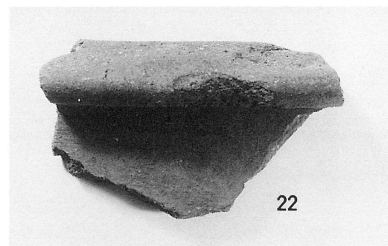
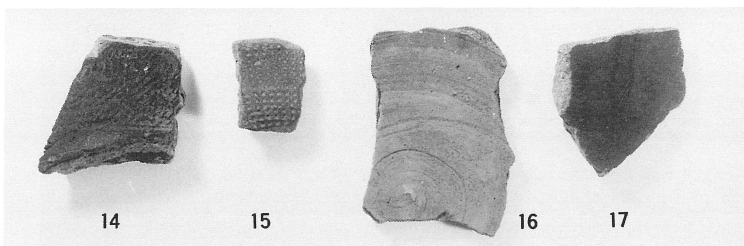
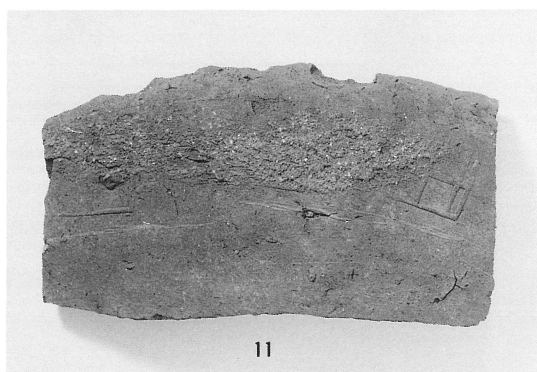
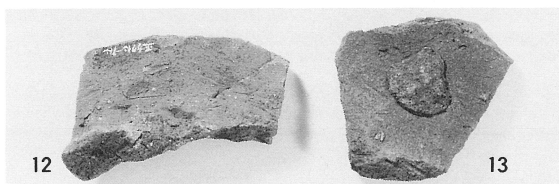
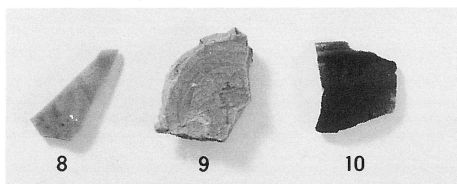
第4トレンチセクション

図
版
6

出土遺物



中世以前の遺物



中近世の遺物

千葉県八千代市

正覚院館跡

— 埋蔵文化財発掘調査報告書 —

印刷日 1999年 3 月31日
発行日 1999年 3 月31日
発行 宗教法人 池証山 正覚院
編集 八千代市遺跡調査会
千葉県八千代市大和田138-2
電話 047 (483) 1151 内6111

印刷 株式会社 山下印刷
電話 047 (430) 8221